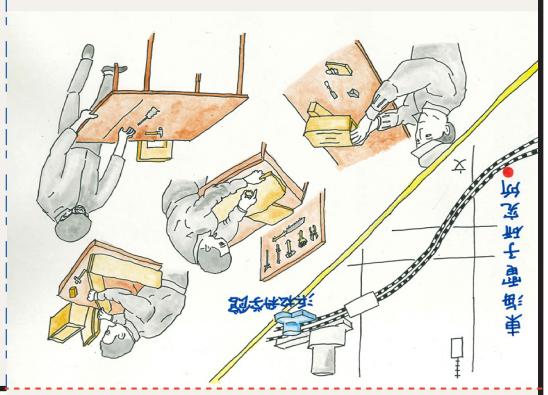
浜松の偉人シリーズ ミニ折本【堀内平八郎 編】

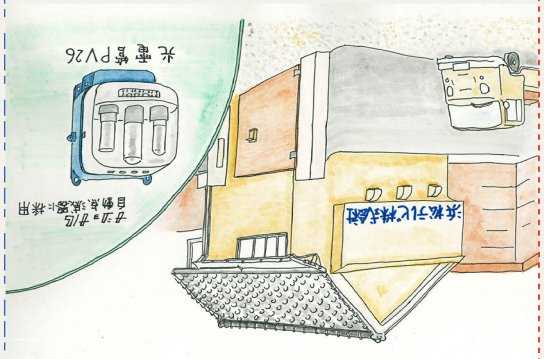
A3 サイズで印刷して、線のとおりに切り込みを入れ、折ってください

切る ━━━ 山折 ┈┈┈ 谷折 - - - -



太平洋戦争が終わりました。
昭和 23 年（1948 年）平八郎は、浜松市海老塚町（現：中央区海老塚町）に東海電子研究所をつくりました。
そこで、電子管の研究や製作を始めました。

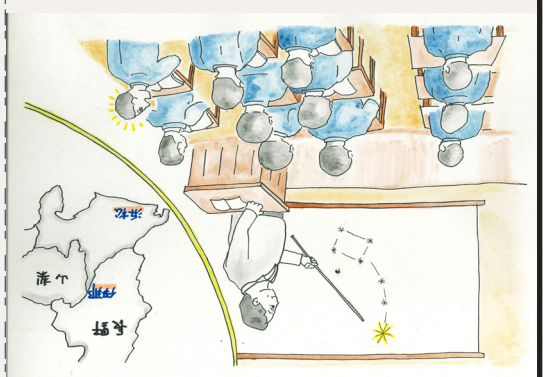
しかし、戦後のたいへんな時期で、電子管づくりという特殊な事業はとても難しく、机や工作用具まで自分で作っていました。



そんな苦しい時代を経て、世の中がようやく落ち着き始めると、松下電工から外灯用の光電管の注文が入りました。
やっと、商売として仕事が成り立ち始めました。

そこで、昭和 28 年（1953 年）浜松テレビ株式会社（今の浜松ホトニクス※）をつくり、最初の社長となりました。

※浜松ホトニクス
「光を使いこなす技術を開発して社会に役立てる」会社。浜松市中央区に本社がある。光関連の電子部品や電子機器を製造・販売する。



堀内平八郎（1915 年）は、大正 4 年（1915 年）の長野県伊那市（旧長野県上伊那郡西箕輪村）に生まれました。
算数と運動が、得意な子どもでした。

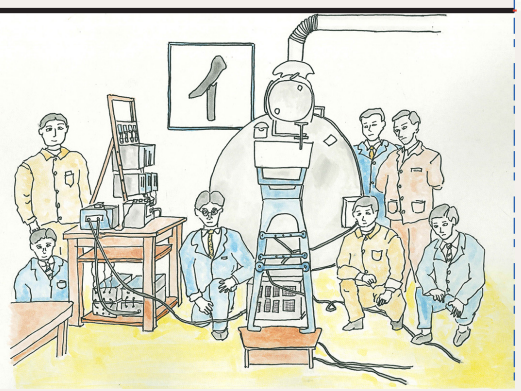
小学校の授業で「今見ている北極星の輝きは、800 年かけて地球にやってきた光です。つまり 800 年前の光だよ」と先生から聞き、平八郎は、光について驚きと興味をもつようになりました。

堀内平八郎は、浜松テレビ株式会社（今の浜松ホトニクス株式会社）をつくり光電子増倍管の開発に大いに貢献した人です。

浜松の偉人シリーズ　ミニ折本

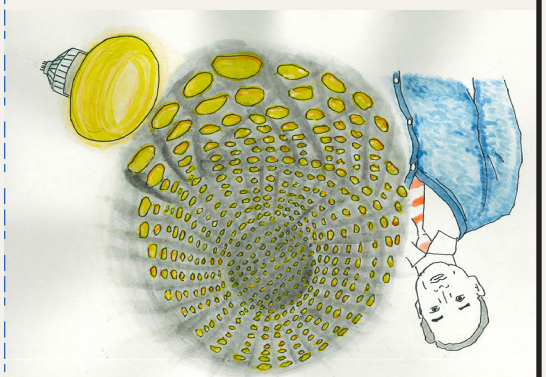
工業学校へ進学しました。
そこで、平八郎は、電子管研究に熱心に取り組みました。
平八郎と浜松の関係は、この時から始まったのです。

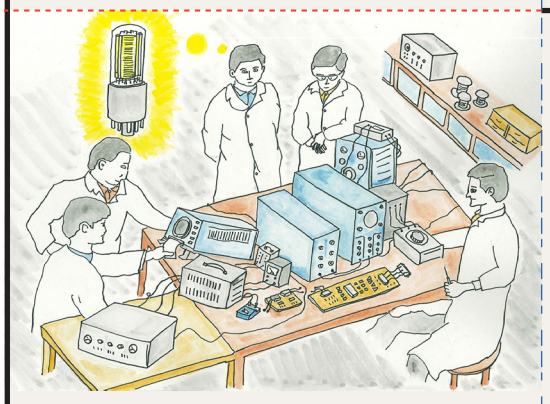
※高柳健次郎 (1899 ～ 1990)
1926 年雲母板上に書いた「イ」の字を、世界で初めてブラウン管上に電子的に表示することに成功した。



後に“テレビの父”と言われる高柳健次郎が、浜松高等工業学校※（今の静岡大学工学部）で、テレビの研究をしていました。
光にたいへん興味をもっている平八郎は、健次郎のもとで学ぼうと、浜松高等

昭和 62 年（1987 年）浜松ホトニクス製の光電子増倍管を使ったカミオカンデの研究で、小柴昌俊東京大学名誉教授※が、世界で初めて大マゼラン星雲のニュートリノ観測に成功しました。





平八郎は、次のようなことを考えていました。
「地球上には空気、水、光があり、私たちはそれを毎日無意識に使っている。光を高いレベルで活用する手段を開発すれ

※小柴昌俊（1926 ～ 2020）
物理学者、愛知県豊橋市出身。中学 1 年のとき、担任の先生からもらった『物理学はいかに つくられたか』（アイザック・アシモフ著）がきっかけで、物理学と出会う。

これにより平成 14 年（2002 年）ノーベル物理学賞を受賞しました。

常設展 2 階 展示「光電子増倍管」

浜松ホトニクスは、このような光関連の研究開発型の企業として発展しています。
堀内平八郎は、その創業者として活躍しました。

偉人にまつわる「こぼれ話」

堀内平八郎と高柳健次郎が学んだ「浜松高等工業学校」についてのこぼれ話。

浜松高等工業学校は大正１２年（1923 年）開校。
場所は、今の西部協働センターと浜松市立高等学校のあたりにありました。
しかし当初、県の建設場所の案は龍禅寺町の周辺でした。
もし県の案が採用されていれば、浜松科学館の近くにあったかもしれませんね？

浜松科学館で会いましょう！

常設展 2 階 展示「堀内平八郎」

主な参考資料

・企業サイト「浜松ホトニクス株式会社」
・「光と共に 浜松ホトニクス 40 年 の歩み」
浜松ホトニクス 40 年史編集委員会／浜松ホトニクス株式会社

浜松科学館
Hamamatsu Science Museum

作成：2025 年　監修：浜松ホトニクス株式会社

作成：浜松科学館　監修：浜松ホトニクス株式会社